

活動を始めたきっかけ

司会(萩原なつ子さん、以下司会)

本日は、過去の女性のチャレンジ賞受賞者の中から4名の方に座談会に出席いただきました。まずは、自己紹介と活動を始めたきっかけを教えてください。

惣万佳代子さん(以下、惣万さん)

私は富山の病院で20年間看護師として働いていました。お年寄りは一家に帰って死にたいと言われ、看護師として力になれないものかと思いい病院を辞め、仲間と在宅支援のデイサービスを始めることを考えました。地域の子どもからお年寄り、障害者の方たちも一緒にデイサービスをしたいと思いましたが、それぞれ法制度が違うため、初めは行政の方たちに理解してもらえませんでした。今では行政と一緒に頑張って、特区を申請し、規制緩和につながっています。平成5年に始め



萩原なつ子さん



惣万 佳代子さん

た、子どもも、お年寄りも、障害者も利用できる「富山型デイサービス」は、富山県下で105事業所、全国で1,400を超える事業所(平成26年3月)が存在します。市を動かし、県を動かし、国を動かしてきたというところで、賞をいただいたのではないかと思います。

司会 永井さんも行政との連携、協働を視野に入れながらスタートされたと思うのですが、いかがでしょうか。

永井寛子さん(以下、永井さん)

私は平成7年に町議会議員になり、今年4月まで続けてきました。途中4

の話と一緒に語り合う場を作っています。

司会 岩岡さんはいかがでしょう。

岩岡ひとみさん(以下、岩岡さん)

私は皆さんと違って事務局長という立場なので、いわゆるナンバー2です。私自身は、17歳で子どもを産みました。高校は愛知県にある進学校に通っていたのですが、恋に落ち、子どももできて、夫は7年上で仕事をしていたので、結婚して、普通に奥さんになった方がいいと思いました。3年間専業主婦をしていましたが、夫から社会に出たらどうかと言われ、ネイルのスクールに行きました。その後、た



岩岡 ひとみさん

また現在の理事長と出会い、訪問美容活動を始めました。美容師の免許を取るために通った専門学校で、10歳くらい年下の女の子たちが、美容師は土日もなく就業時間が長いので、「私たちは就職しても、子どもを産んだら働くところがないんです」と言っていて、キャリアを積んで、手に職がある彼女たちと介護施設の仕事はマッチングできる、仕事になると思えました。活動をやっていく中で、支援対象も高齢者だけではなく、障害者の方の就活支援やがん患者さんのためのかつら作り、美容の技術を通じて上国の貧困層の若者に教える活動

等、幅が広がってきました。

男性からのサポートや、企業の支援

司会 4人のお話を伺っていると、いろいろな意味での転機や出会いがあると思えました。例えば、夫の後押しという話がありました。男性からのサポートは何かありましたか。

惣万さん 最初、病院を辞めてデイサービスを始めるという話を友達に話したら、その友達が、栃木に住んでいた男性の友達に話をしたので。そうしたら、その人がとても感動して富山まで来てくれて、「あなたたちには何が一番足りないのか」と聞くので、正直にお金が足りないと言ったら、東京で銀行口座を作って、全国のいろいろな方に声をかけ、お金を集めてくださいました。男の人は、どの人も最初は、「無理だ。事業にならないことはするな」と反対するのですが、いざ始めようとしたら力になってくれました。男性は、いざとなったら支えてくれるのですが、だからと言って、男性が行動できるかと言ったらできない。男性が5年後、10年後、20年後を考

えるのに対して、女性は、経済とか、お金を考えず、先に行動してしまう。それが女性が社会を変えていくことだと思えます。

永井さん 同感です。私たちも無知で、世間を全く知りませんでした。無知は最大の武器だと思います。最大の難関はやはり資金調達です。資金

食器のレンタル事業を始めました。日本ですらなものでなかったということ、平成15年には、経済産業省のモデル事業に採択されました。その後、リース食器のレンタル事業1本で活動しています。

今村久美さん(以下、今村さん)

正直な話、賞をいただいたときは、「女性なのにがんばっている」と言われているような気分、とても違和感がありました。女性だからという理由で、特別苦労したわけではないのに、と。でも、授賞式で先輩たちのスピーチを聞いて、先輩方の苦労によって、私たちは、違和感を持たずにやりたいと思える仕事を選択することができた世代になっているのだということ、初めて知りました。私は岐阜県高山市で生まれて、実家は土産物屋を経営していました。両親も親戚も大学の人はいない環境でしたが、関東の大学に進学し、そこで、世の中には実は格差があるのだということに気づきました。教育の機会は均等だけれども、何かチャレンジしてみようと思える機会や、それを思う前提となる生活環境には格差があるということ。何か解決できる方法を見つけたと思います。それでカタリバという団体を始めて、地域の年齢の近いお兄さん、お姉さんが、縦の関係ではなく、斜めの関係と呼んでいるのですが、そういう人たちと高校生が人生



調達をどうするかといったときに、いろいろなめぐり合わせで手を差し伸べてくれる人たちがいました。私の場合は、たまたま地元企業の社長が、私たちの話を聞いてくれる機会を持ってくれて、社長室で「私たちはこういうことをやりたい、それには資金が足りないんです」と言いました。後から考える